14-008　里山　010214
映像でアマゾンの森林地帯を宇宙から写真撮影したものを見た、5 年前、10 年前、20 年前と映し出された。広大なアマゾン、手つかずの原始林が近年開発に次ぐ開発で原始林を燃やして焼畑農地に、農地が道路に人家に、人家が集まってコンクリート建造物の都市に、そのようにみるみる変わってきたようで、100 年もすれば原始林が消えてしまうのではないかと解説されていた。
須賀丈、その他著＜草地と日本人＞の中から。
著者は序章で、堀辰雄著、昭和初期の小説＜風立ちぬ＞の一節を紹介する。
「私はそれから十数分後、一つの林の尽きたところ、そこから急に打ちひらけて、遠い地平線までも一帯に眺められる、一面に薄（すすき）の生い茂った草原の中に、足を踏み入れていた。そして私はその傍らの、既に葉の黄いろくなりかけた一本の白樺の木陰に身を横たえた。其処は、夏の日々、お前が絵を描いているのを眺めながら、私がいつも今のように身を横たえていたところだった。あの時には殆どいつも入道雲に遮られていた地平線のあたりは、今は、何処か知らない、遠くの山脈までが、真っ白な穂先をなびかせた薄の上を分けながら、その輪郭を一つ一つくっきりと見せていた」
著者＜草地と日本人＞はこの文章に 100 年足らず以前の軽井沢、地平線と遠くの山脈まで見渡せる広い草原が在ったという。日本各地の明治時代の写真を探し出し現在と比べている。もちろん現在の写真は、建造物がたくさん写っているが、その奥の山並みには背の高い木々が写っている。それに比べて明治時代の写真には、広々とした草原が山の麓まで続いている、山の麓にも高い木はない。著者は「日本各地の広大な草原が、数千年、一万年以上の歴史があり、気候が温暖化・湿潤化した後氷期約一万年前以降には、火入れ・放牧・草刈りなどの人間活動が草原を維持してきたと考えられる」という。
“里山”という言葉は「都市近郊の雑木林を守ろう」という人々の機運が高まり、様々な活動が行われ一般化した。江戸時代からあった言葉で、各地の藩の林役人の書類に“奥山”“里山”という言葉があるらしい。例えば尾張藩の文書にも里山の記述がある。「木曽山雑話：木曽御材木方」は、現在の長野県木曽郡上松町にあった寺町兵右衛門が、宝暦九年（1759）に、当時の山の区分、地形、土地利用などの定義を詳しく記した実地検分録である。この文書の中での里山は、元々は裏木曽（現在の中津川市周辺）で使われていたものでかなりの字数を割いて解説されている。「村里や集落に近い山であること」「木々の成長が悪く材木にならないこと」「こうした山の多くは百姓の私有地として利用されてきたこと」がわかる。
環境省自然環境局の HP「里地里山とは原生的な自然と都市との中間に位置し、集落とそれを取り巻く二次林、それらと混在する農地、ため池、草原などで構成される地域です。農林業などに伴うさまざまな人間の働きかけを通じて環境が形成・維持されてきました」
現在は農業用としての森林の利用がほとんど行われなくなった、平野に広がっていた農地に加え、丘陵地や低山地帯にあった森林までもが、都市開発などによって失われつつある。
幸いにもオレは度々山に登る、山を歩く。“だだっ広い草原”“自然林”と何時も出くわしている。大昔は“草原”が普通に広々と広がっていたとは知らなかった、草原は人の手が入って雑木、広葉樹林を伐採して出来上がっていると思っていた。日本の平地も丘も山もそのままにほおっておくと、たちまち雑木が生え青々するものと思っていた、大昔は草原が広がっていたとは知らなかった。いつも行く比良山には薄が生い茂る草原がある、秋に行くとその白い薄の穂先がずっと上まで続き壮観な景色なのだが、そこは元々スキー場の跡、スキー場が廃業し、リフトやケーブルが取り払われ、小屋も店も無くなった処に薄が生い茂っている、そしてあと何年かすれば木が育ち始め広葉樹林の林が現れ、薄が隅に追いやられるだろう。日本のほとんどの山には利用価値の高い、材木として使用される針葉樹、特に杉・檜が植えられている、垂直に天に向かって伸びた大きな幹、上の方は黒々と葉が生い茂り木漏れ陽さえ入り難い暗い森が続く。植林がなされていない山に行くと、好き勝手に曲がりくねった木々が生え、我勝ちにその勢いを誇って緑を茂らす王者の大木、その下には「明日こそ」ひ弱に生える小さい木、草が生え、獣の糞があちこちに、秋には木の実が散乱している。これを書きながら雪の里山、歩きたい、登りたい、としみじみ。

14-009　マイナー　　050214

日本の中世、武士が貴族の支配から脱却した。武士の時代の始まりが鎌倉時代。武士が日本を統一し、乱世が終焉を迎えたのが安土桃山時代。

平安時代の武士は、天皇に仕え、貴族に仕え、大寺院・神社に仕えた。

鎌倉時代の武士は、将軍一人に忠誠を誓う、鎌倉幕府と主従関係を結ぶ。

中世には農業技術が発達、農民が豊かになった。地主・小作農・下人の三者で村落が構成された。

此処に入ってくるのが一向宗。阿弥陀仏の前では全てが平等、村落は頂点を持たないことで安定。主君を頂点とする戦国大名にとって、一向宗・一向一揆は敵。戦闘になり敵を、一向宗信者を虐殺（伊勢長嶋で 2 万人、越前で 1.2 万人）戦闘を勝ち抜き次第に時代は徳川幕府に向かう。＜本郷和人先生＞

＜柳田国男先生＞は、日本の定住の民、農耕生活をして江戸時代には寺院の檀家として登録されていた人を“常民”と呼んだ。天皇、時の権力者、農民、それ以外の人など・・と考えながら、“天皇家”に突き当たった。見回しても 1500 年間続いた王家は無いのでは、これはなんだろう。王様候補は次々現れ、出てきたが、その権力者は天皇家に自分の正当性を求めた。＜西研先生の弁なら＞天皇家は「古事記」「日本書紀」のような形で古くから正統性のある物語を持っている、神聖性を持っている。他の国には“宗教がある”“天がある”・・これだけではもうひとつ、オレにはわからない。

＜沖浦和光（かずてる）先生＞日本は律令制度以来、農業を基本とする“農本主義国家”だった。農民だけが良民とされ、それ以外の者は、農民を助ける補助的な人間。これは中国から来た思想で、大和朝廷が導入した。律令制に農本主義が投影されることになる。“定住しない”“農耕しない”“体制と関わらない”漂泊民“山の民”“海の民”がいた。織田信長が攻めた石山本願寺（一向宗本山、後の大阪城、）対抗したのが毛利軍と村上水軍（一向宗の熱心な門徒）敗れた水軍の人たちも“海の民”になったのでは。瀬戸内海にはたくさんの島があり、たくさんの漁民がいたはずだが、漁業の記録、漁民の記録が見当たらないそうだ、農地農民の記録はたくさんあるそうだ。一方“山の民”が各地で発生したのは近世末期、18 世紀、天明、天保の災害や飢饉が襲い餓死者が大量に発生し地域社会は危機的状況に陥った。松平定信の自叙伝に「人別帳から 150 万人が行方不明となって消えたと記されている。おそらく山伏や無宿人となって各地を放浪したのでは。1 番に天災や飢饉で耕地を放棄し、食料を求め流浪した。2 番に藩の過酷な収奪や圧政に耐えかね、逃げ出す「走り」。3 番に藩主への訴願を目的に集団逃亡「逃散」、こういう形で農民は逃げ出し追われ、行く当ても無く山に入ったのではないか。小さい船を住処として家族で年じゅう船で暮らす人たち「家船（えぶね）」、山の中、川の傍に暮らし定期的に移動する人たち「さんか」、そう言えば微かな記憶に、頭の隅で見たような気がする、最近まで日本にはそういう人たちがいたのだ。強いものに逆らって、敗れ去った人、虐殺された人はもう帰ってはこないが、命からがら逃げきれた人が何時の時代にもたくさんいる。日本の国土は農民が住める面積、農耕地はそう多くない、ほとんどが山間部と、四方を囲まれた海。追われて山や海で暮らした人、暮さざるを得なかった人たちがたくさん居た、

つくづく考えるに歴史というものは、勝者の物、勝者がいかに勝った、どうして勝った、勝者の事は事細かく語るが、その時に敗者はどう動いた、なぜそうなったのかまでは説明するが、敗者がその後何処に行った、何をした、どう生きた、どうして暮らした、どうして亡くなった、その子孫はどうなった、というような記述はない。オレも今までは英雄豪傑の活躍、知恵者、大政治家、大先生、大芸術家には心躍らせ、興奮して「オレもあやかりたい、オレも大物になりたい」といつも思っていた。オレも晩年になって「ちょっと待て、それは違うぞ」オレがマイナーであるが故に叫ぶのではない。マイナーな状態、それこそ人も物も感覚も時間も空間も、そのマイナーな状態を見つめ感じ味わい昇華して、オレの中でどんどん高める。「マイナーこそ芸術の根源と違うのか・・」と叫びつつ感覚を研ぎ澄ませよう。　　展覧会が近づいてきた。小さい絵が描ける。今までうまく行かなかったのに。

14-010　雪山　　　130214

「ア！これではないか・・」黒いものが顔を出している、祈るような気持ちで雪の中に手を入れてみると正にそれはキャップだった「あった、やった・・」と悦んだけれども、皆さんがお聞きになれば「何？キャップだって、往路で落とし、袋で回収、嬉しいだって、200円300円の・・」馬鹿にされそうだが、そんな価値もないものを落とし探し出せたと歓喜している自分に呆れております。

前回比良に行ったとき「雪山はワカンだよ」と叫んでいたおじさんに倣って、物は試しと「2500円送料込み」で木製のワカンを手に入れ「うまく歩けるか、登れるか、楽しめるか」と比良に行く機会を狙っていた。肝心のワカンの話はさておき、まずはキャップの話。

最初のワンピッチを歩き始めて「今日は外気も風も冷たい、雪も前回より多い、しかも寒い所為で雪も固い」と思いながら歩き出した。所々に雪か風による倒木、雪の重みで垂れ下がった太い幹が登山道を遮る。跨（また）いで行くか、潜（くぐ）って行くか、巻いて行くかと遮る物の状態は様々だけれど細い道なので背を低く屈（かが）んで通り抜けた。ザックを担いだことのある人なら「背中のリュックが何かに引っかかるのは嫌だねえ、引っかかると体力が半減する、冷や汗が出る」という経験をお持ちだと思うけれど、悲いかな背中に目のない人間は背負ったザックの何処が引っかかっているのか皆目見当もつかないまま、力任せに進もうにも進めないし、引くにも引けない、行も戻りも出来ないなんて経験の一つや二つはあるでしょう、あれは嫌ですねえ。このワンピッチの間にそんなことが4回5回続きました。今日は日帰りの小さいザック「電車に乗るのに邪魔になってはいけない、凶器になってはいけない」とピッケルのT字の部分を底に入れ、ピッケルの上の部分がザックを突き出30センチも出ていた、もちろんピッケルの先にはゴムのキャップがしっかり嵌め込んであるので危険はない。歩き出して「まだまだピッケルもワカンもアイゼンも必要ない」とそのまま進んだら道を阻む倒木に遭遇したわけで、背をかがめ、四つん這いになって通り抜けようとしたら、ピッケルの先が引っかかる、それも2度3度。次の休憩でキャップを外そう、キャップが落ちてしまう、と思いつつ、1回目の休憩地点、寒風峠に着きタオルを忘れてきたことに気が付いた。この寒さ大阪に居てもアトリエに居ても冷え冷えとする寒さに汗のことなどすっかり忘れていた。手袋で汗をぬぐいながら、ピッケルのキャップが無くなっている事に気付いた。戻って探そうとも思ったが「ええい200円300円の物だ、捨てオケイ」と忸怩たる思いを封じ込めた。

トロトロ歩いていると、何と登山口まで30分もかかってしまった。さすがにこの1週間は寒い。昔、度々信州の山に登りに行ったが、乗り物を降りるとその外気の冷たさにヒヤリとしていた、おお、信州にやってきたとその冷たさが実感させてくれたが、その冷たさが今、大阪にも来ている。オレのアトリエは贅沢に広い、天井も高い、自慢の代物だけれど、難点は“夏暖かく”“冬涼しい”ことだ。もう一度アトリエを作るならアトリエ自体はこのままでいい、更に大きいのはもっといいが側に小部屋を作るべきだ、寝泊りのできる小部屋、冷暖房の効く小部屋が在ればいい、アトリエが暑い、寒いと言っても一時避難にその小部屋に逃げ込めばいい、アトリエと小部屋の境には透明ガラスの入った窓がいるね、小部屋に避難してアトリエの絵を眺めながら次の作戦を練ればいい、と世迷い事を言いつつストーブのあまり効かないアトリエに籠りきっている。勿論ここ滋賀県の湖西の辺りは、大阪に比べるともっと温度も低いだろうし、吹く風が顔や頭にヒヤリと冷たい。滋賀県の天気予報、県内：高島市の天気予報を調べると3時間おきのコーナーがすべて太陽マーク、9時からも12時からも3時からも晴れのマークが付いていた。朝起きてさあ出発と家を出た時には、大阪はどんより曇っている「まあ、いいか、曇っていても雨ではないだろう、降ったとしても雪だろう」と気楽に電車に揺られていたが、トンネルを抜けて滋賀県に入るとキラリ晴れている、琵琶湖が光っている、比叡山も比良山も上の方は白い、対岸の伊吹も鈴鹿の山も上の方は白いが麓には雪は積もっていない。本当晴れた、これは素晴らしい。こんないい天気の日に雪山に登れるのは最高だ。今日は何処まで行けるかわからないけれど、楽しい山行になりそう。

2時間も経ったころから雪が深くなってきた、ワカンを着けた、おおこれは歩ける、潜らない、やや平らな処は沈み込まない、斜度のきつい処に行くと、ずるりと滑る、蹴りこんでみると奥まで食い込みなんとか登れるが、ずるりもある。ずぼっと潜ってしまうとワカンが引っかかって足が抜けない、もっと練習の要ありのワカン初体験だった。きつ

い風が吹き出し、雪が飛ばされ天気も曇り出して来たので、今回も頂上を断念。ゆっくり山行、ワカン体験、キャップが戻って来た、と帰途に就いた。

14-011　玄米　1400214

食の話、食い物の話、グルメの話は今までにした事が無い「ちゃらちゃら食い物の話なぞ・・」と言いながら最近の皆さんのブログやら facebook を見ていると、食卓に並んだ普段の食事、お店に行った時の豪華なお皿、自慢の一品を見せられて「旨そうだ、綺麗だ」と思いつつこんないい物を食っているのか、楽しんでいるのかと感心している。“オレのブログ：久しぶりにサンマを食った”は誰の事だと思いだし、サンマの旨さ、イワシの旨さ、ボヤキならぬグルメの話をしている自分に呆れているが、皆さんのようなうまい食事の話、豪華宴会の話ではなく、今回は玄米の話。もう 2 年ぐらいになるが玄米に凝って玄米を炊いて食っている、これが実に旨い。コメの種類というか名前によってずいぶんと味わいが違う、旨いのもあれば不味いのもある、値段の問題ではなく、好みの問題、オレの味わいの問題なのだろう。よく言う“ギンシャリ”これも旨いものだが「コメは白米、ギンシャリだ」とそれ以外を否定する人じゃないオレは、むしろ、玄米の口当たり、何かが引っかかる、何かが後味として残る、味がする、旨みがある、というわけでオレにはなかなか好評なのだ。

玄米の炊き方

炊飯器には,玄米モードがありますので、炊飯器の説明書通りにやれば失敗はほとんどなく柔らかく炊きあがるはずです。夜タイマーでセットすれば浸水時間もとれるし指定の時間に炊きあがります。浸水させなくても炊飯器で炊くと、中は柔らかく炊きあがりますが表面の表皮の部分が硬く残ってしまいます。食べたときにこの表面の「ブチッ」という食感が残り、これが「硬い」という表現になっていると思います。ふっくらと美味しく炊くには、しっかり浸水させることが大事です。玄米には食物繊維や、ビタミン、ミネラルが豊富です。食物繊維にいたっては、白米の４倍６倍近い。炊飯器で炊くよりも、土鍋や圧力鍋で炊いた方が玄米は美味しく食べることができると思います。ふっくらもっちり炊きあがります。玄米を食べるときは、よく噛んで食べましょう

玄米プロの言葉が続きます。なにしろ旨いのは、土鍋で炊くことだそうだ。

白米を土鍋で炊いたものを「炊きたてだよ」と板前さんが茶碗によそってくれた「これはおいしいでしょう」と言われ「旨い」と食った。食い物もしみじみ食わないと味がわからない、勢いに乗って「旨い」と言ったものの、どんな味だったのか舌の記憶がない。山仲間は鍋や飯盒で飯の炊ける「始めちょろちょろ中ぱっぱ」と言いながら「簡単だよ」と豪語するが俺にはできない。そんな仲間も山には乾燥米、アルファーコメを持っていく。荷物を軽くするためだけれど、旨くない、冷えると不味い。

昔“五穀セット”という小袋を白米に入れて炊いていた、これも結構旨かったが・・と調べてみた。

「古事記」では稲・麦・粟・大豆・小豆だそうで「日本書紀」では稲・麦・粟・稗・豆だそうだ。古代中国にも五穀という言葉、十穀という言葉があったそうだが、内容はまちまちで一定していないそうだ。

稲の話になると、日本人「言う事がいっぱいある、これを言わんと・・」とたくさん出てくる。

米は味が優れており、かつ脱穀・精米・調理が比較的容易である。

イネは連作が可能で他の作物よりも生産性が高く、収穫が安定している。

施肥反応が高く、反対に無肥料で栽培した場合でも収量の減少が少ない。

1 万年前中国長江流域が起源らしい。

日本では 3000 年前九州に水田跡がある。6000 年前（縄文時代）稲作がおこなわれていたという学説もあり。

北海道の寒冷地でも、明治ぐらいからコメ作りが行われるようになった。

14-012　歴史の話　180214
歴史は権力闘争の勝者の話、勝者がいかに勝った、どうして勝った、勝者の事は事細かく語るが、その時に敗者はどう動いた、なぜそうなったのかまでは説明するが、敗者がその後何処に行った、何をした、どう生きた、どうして暮らした、どうして亡くなった、その子孫はどうなった、というような記述はない。と言うような事を当ブログ 14-009＜マイナー＞で書いた。
本郷和人という歴史学者が面白いことを言っている。
私はずっと天皇・朝廷など、政治史の解明に従事してきました。そのとき心がけていることは、実証的であること、つまり、古い日記や文章に忠実に、史像を再現していくことでした。きちんと証拠（歴史資料）を明示しながら論を進めていく。自分勝手な論を振り回さない、それが研究者としての良心であり、誇りであると自負していました。けれども少し立ち止まって考えてみると、日記や文章を書くことができるのはほんの一握り、上層の知識人だけです。
恩師石川進が実証的研究をパタッとやめ、民俗学と考古学を駆使しながら、知識人などの特別な人ではなく、いわば「普通の人」の研究を始めた。上から眺めていては、社会は見えてこない、もっと「中から」「内側から」見てみよう。
これを読んで「そうだ、これには賛成」と呟くが、「質が悪い」「身勝手な」「これはどうも」と疑問符が付く叫びも呟きも横行しているので、こちらの見る目、感性が大事になってくる、自分自身で解って消化して昇華しなければ。

本郷和人先生の話が続く。
僕は今の天皇に対して、大神主さんというイメージを持っています。天皇というのはたまたま生き残ったに過ぎない、日本人の物持ちの良さ、要らなくなったら捨てるというヨーロッパの合理性が無い。秀吉の時代に天皇の実力は完全になくなった、実力が無くなった故に、作り変えることも可能になった、天皇自身も立場が軽くなった「シンボルとしての天皇、政治を行う武家」という構図が出来上がった。

＜西＞私は、天皇が、天皇家が日本人の歴史の中に在ったと思う。これは個人的な信仰と同じです。ただ一部の日本人が「天皇の存在に対して、敬愛すべき、敬うべき、万世一系を大事にすべき、日本人ならこれらを共有すべき」と言い始めた瞬間に大変なことになる。国家というものは、国家が存在し、自分自身が国家の一員と認める時に、天皇を基盤にしてはいけない。国民としての共存は、「思想信条は自由にしましょう」同じ国家に属していると認める以上は、うちに向かって互いの権利と自由をきちんと守って、平和共存しましょう、発展の努力をしましょう、税金を出しましょう。平和共存のためにルールを作り守りましょう、納得のいかないルールなら改正しましょう。外に対してはもし攻めてこられたら、自衛しましょう。
＜西＞王権の基礎は覇権の原理です。王権がそれ自体自立することが極めて難しい。覇権の原理は「最強者」が王になる、しかし派遣の原理は極めて脆い。覇権の原理で王権が確定しても、時代と状況が変わると、現にある王より勢力の強いのが出てくる。最強者原理から選手交代という事になる。これでは権威としては不安定。

この続きはどんどん面白く展開していく、千年も昔の「普通の人」彼らの喜怒哀楽、彼らがどうした、どう考えた、どうして亡くなった、というようなことが見られたら素晴らしい、道案内になる面白い本にまたまた出会えますよう。
よく行く比良さんに小女郎池がある。＜昔、麓の南船路の里に、久右衛門とお孝という夫婦がいた。ある日お孝は、池のあたりへ薪を取りに来ていると、美しい青年（実は池の主、大蛇の化身）に出会った。以来夜になると、池に通うようになったお孝の行動に不審を持った久右衛門が、ある夜後をつけ、お孝が池に入るのを見て驚いた。気づいたお孝は、お詫びのしるしにと、左の目をくりぬいて夫に渡し、「赤ん坊が乳を欲しがったらこれをしゃぶらせてほしい」と言い残して、池に入ってしまった。孝女郎が入った池だから孝女郎池、それがいつしか小女郎ヶ池になったといわれている。＞

14-013　溶ける　210214
「描ける、なんとなく描ける、オレも、溶けたか・・」悦にいる。今まで描けない、どうすればいい、どう解決すればいいと一筆一筆が重く、絵の具を出すのも億劫で「これはここに一筆入れた処でうまくいかないだろう、だめだろう」と思案しつつ入れた一筆が案の定、予期した通り愚かな一手、ますます滅入り、その日はただ佇むだけというようなことが多かった。「オレはもうだめか、終わったんか、描けないのか・・」とも思っていた。今は描ける、絵を眺めていると次の一手が浮かぶ「あれだ」と思ったところにうまく命中する、納まる、満足する。「オレもいよいよ溶けてきたか、もうそろそろ溶けなきゃいい歳だもんね」苦衷を吐露して大げさだが、申し訳ないが、三宅さんが「この絵に 3 か月、半年もかかるの・・？」と言った。本当は「何の苦も無く、サラリとできあがる」が一番だ。溶けるがいいか、蕩けるがいいか、考えていた。火にかけたバターが解けるように、作品が進化して今まで硬かった部分、解釈できるような説明、論理武装の鎧、そんなつまらない物を放り去って、苦も無く作品が出来上がる、理解も解釈も説明も要らない、それがいい作品だ。

昔、知人の画家の絵を前にして「この絵がそのうち、バターが解けるように固体から液体に、溶けたバターのようになって、魅力的な絵ができるといいねえ」と本気で思った。彼はオレの絵と違って、ヨーロッパの風景画、ユトリロや佐伯雄三がやっていたような絵を、油絵の具を盛り上げて描いていた。しばらく没交渉の後、展覧会の案内状をもらった、なんと百貨店での個展、「溶けたかな・・」と見に行ったが、期待した溶け方ではなかったが売れっ子作家になっていた。話によると、号 10 万円の絵が何点も売れるとか、「溶けずに売れっ子になっちゃったか・・」と羨んでいるうちに亡くなった。号 10 万円とは 6 号（A3 に近いサイズ）で 60 万円、10 号なら 100 万円、0 号 15 万円、3 号だと 25 万円とむしろ割高になるようだが、こんな値段で売れれば嬉しいだろうね。

アメリカで絵を描いたとき「この絵のコンセプトを話してください」と言われた。日本にいて絵描き仲間と話す時にははっきりした理論はなく曖昧に「ここはそんな具合だね」「あそこはあんな塩梅だね」と意味不明の事を呟いても理解しあえた。「アメリカは多人種、多民族、多宗教の国、はっきりした表現や理論が無ければ他人には通じない」絵でも音楽でもその抽象表現を説明する、分析する、解釈するというようなことが必要。「オレの絵で、ここに使っているブルーの色、この地の、此処の空を見ることによって触発された、なのでこのブルーでないといけない、このブルーがこの絵には絶対条件だ」と叫んでいた。それ以来自分の絵に対してなるべく考えをはっきり持つようにしている。

溶けるという事で、自分勝手な解釈なのだけれども、中上健次という小説家の晩年の作品を読んだ時、「うわあ、溶けたな、蕩けたな」と思った。オレと同じ年だけれど 48 歳で亡くなってしまった。亡くなった時には堂々とした大物作家だったので、ニュースにもなった、追悼の本もたくさん出たのではないか、当時彼の本をぱらぱらめくって、すぐに伏せてしまった、面白くなかった、くどいというか、言いたいことが伝わってこないのか、2.3 ページでその後は読まなかった。オレが 60 歳を過ぎた頃に、古本屋で「重力の都」というのを見つけて買った。装丁に知人の画商が絶賛するリアリズムの画家の絵があったので買ったのかもしれないが「またまた読めないかも」と思いながら読みだした。暴力と性愛が淡々と書かれている。題名は好きではないが、内容は素晴らしい。彼がもう 20 年 30 年生き続けたらといかにも惜しい。サービスに載せますが、あなたは 20 歳を超えていますか・・。

声を上げて女が動く度に濡れて光る女陰が苦しげに動くのをみていた。指で触り、唇を圧しつけ、舌でさぐると女は目を閉じたままこらえかねるように下に敷いたコートのえりに顔をうずめ、早くして欲しいと言った。女は御人にもそう言ったのだった。山の向こう、伊勢の墓の下で溶けるように腐り骨が浮き出た御人が、昔、傷一つない褐色のつややかな張りつめた肌と筋肉を持っていて誰よりも力が強い健康な男だった頃に・・・
淡々といい文章だ。

14-014　雪かき　270214
今年も富山にやってきた、雪かきにやってきた。半月ほど前、WEB の定点カメラ、道路情報のサイトにある定点カメラで、国道 301 号線を見ていたが雪が無い、所々、道路の両サイドに白い物が写っているぐらい。滋賀県から福井県に入る県境の峠道、例年なら道路の両サイドから雪を解かす水がじゃぶじゃぶ噴出して雪国の道をひた走っているという感じがよくわかったが今年は全く雪が無い。北陸自動車道の関西から金沢まで、道路は雪が無い「今年は雪が少ないのか」と目的の家に着いてみると家の前の道路は舗装が見えてそのまま横に駐車できる「やはり少ないね、せっかく来たのに残念」と荷物を下した。ここに来るようになって 4 年になる。最初来たときは幹線道路から家までの 50 メーターは除雪車が入っていたが車は上の空き地に停めた。玄関までは車に積んであったスコップで雪かきをした。屋根から落ちた雪は高い処ではほとんど軒下まであった。二人で二日かけやっと 1 メートルぐらいまで下げて帰った。二度目はもう 50 センチぐらい低かったがやはり雪国富山だったが、去年今年は関西とそうは変わらない有様だ。
この辺り「雪かき」というが、「雪捨て」という言葉の方があっている。地面に積もった雪をスコップで掬い取り、“ダンプ”という、塵取りの大きいようなものに雪を乗せて捨てる作業ばかりだ。釉薬がかかった黒瓦の雪はつるりとすぐに落ちる、落ちた雪の上に雨が降り、また新雪が降り、その上に屋根から雪が落ちてくるという繰り返しが 12 月、1 月、2 月と続く、時が経つと“フワリ”の雪も相当に硬い、鉄のスコップを力いっぱい振り下ろしてもおいそれとは掬えない、差し込んでも少し雪の中にめり込むだけ。去年はアルミやプラスチックのスコップを使っていたが、固まった雪、硬い雪は崩せない。その日の午前午後の時間によっても固さが違う、表面と少し下ともう少ししたとではまた違う、そうこうやっているうちに要領がわかってくる。人それぞれだろうけれど「これが一番」という方法で好きなようにやっている。屋根の軒下の雪が一番硬い、それを上からスコップで掬っても歯が立たない、廻りの軟らかい処からスコップを差し入れ、又硬い処の下にスコップを差し入れ、軟らかい雪を掻き出し硬い雪庇をどんどん作りダンプで運ぶうちに、重さに耐えかねて雪庇が落ちる「やった、重い、どっこいしょ」と大きな塊をダンプに載せごろりと川へ落す。
「これだけ雪が少ないと、2 時間 3 時間で終わるかな」と始めたが、固まった雪、硬い雪に阻まれなかなかはかどらない、到着した日の 3 時間、翌日の 5 時間、そう簡単には許してくれない、たっぷりと汗をかいた。
天気予報では午前中は雨になっていたが、朝食後の少しの間、ほんのお湿り程度、後はどんより曇って、時には太陽らしき明るさもあり、せっせと雪が運べた。この辺りは全くの平らな土地ではなく、丘ぐらいの高低差がくねくね続く、山の中の谷筋ほどではないが、窪んだ土地に立った家は日照時間は短い、景色も展望も効かない、湿気が多い、周りを見渡せば家や木や、山肌ならぬ丘肌が大半を占め、青空大空は望めない、後から建てた者の悲哀かもしれない。日本海側に住む人たちが「弁当忘れても傘を忘れるな」というように空も灰色、世界も灰色、所々の雪だけが白い。ニュースでやっていたが、中国大陸から汚染された空気、ＰＭ2.5 というガスが押し寄せてきているらしい。4 月 5 月の芽吹きの季節にやって来たいものだ、5 月のＧＷの山帰り、水に満たされた田圃、田植えが終わった田圃を上から見下ろすと美しい、農村地帯の原風景、水が光り、小さい稲穂が揺れ、風がそよぐ、嬉しくなる田園風景がずっと続く。とはいえこの辺りも、日本の近代化の波が押し寄せ、町も道路も商店も“日本全国統一規格”の感、何処に行っても同じ家、同じ町、同じ道路、同じ商店、これは本当に味気ない、情けないと思うのはオレだけかな。

檻褸君を持ってきた。雪の上に置いてみた、雪の白さだけではつまらない、空を入れる、水浸しの土と草を入れる、雪解け水の中に黒い土と枯れた草、廻りは白い雪「いよぅ檻褸君」重い三脚を持ってきた。田圃と思われる処、あぜ道と思われる処、水の流れる傍「はいチーズ」

14-015　牛嶽　280214
“雪かき”のついでに“雪山”に連れて行ってもらった。富山の小さい山、右も左もわからない、聞いた事が無い名前が連なる「牛嶽に行きましょう」と言われてもどんな山やら何処から登るのやら「お任せします、去年の医王山もなかなか良かった・・」と１時間で小牧ダムに到着。「朝８時から夕方３時までの予定でぐるっと回りましょう」
登山靴、新品ではないが底のゴムを張り替えたものを履いてきた。もう四半世紀も前に買ったもので、当時 3.5 万円ぐらい支払ったと思う上等の軽登山靴、雪山以外はこればかり履いていた、既に一回張り替えに出し、それさえも底が薄くなって永らくお蔵入りしていた。思い出せないぐらいにこの靴にはお世話になっているが、物置を眺めて発見した「ひょっとしてまだ修繕は大丈夫か、もう一回張替えは可能か」サイトで探した“靴修理工房”に写真を添えて問い合わせた。「底の張り替え可能でしょうか」「可能です、￥12000 です。綺麗、に直ります、ただラバーソールが他社製品になります」それを聞いて早速靴を送った。一か月ぐらいたって送り返されてきた靴を見ると、さすがたいしたものだ、上手いものだ、完璧に修理されている、底も横も綺麗に糊付けされがっしりと出来上がっていた。
雪が少ない年とはいえ登山口の辺り、たっぷり雪が残っている、朝の８時、まだ気温が低い、雪は寒さで締まっている、靴下を２枚履いている、足が巧くフィットしている、軽くて歩きやすいこれならもっと早く修理をすればよかったと思うが、この雪硬くもなく軟らかくもなくぐんぐん歩ける。少しずつ高度を上げる、気温は低いが歩くエネルギーで身体が燃え、汗が滲み出てくる、瞬く間に汗が出始めた、またもやタオルを忘れたと後悔しつつ１枚２枚上着を脱ぎリュックしまった。今度は靴が潜りだした、一歩一歩がズボリと潜る、早速持ってきたワカンを装着、ワカンを着けても足首ぐらいまで潜るが、急でない道にはワカンはいい、歩きやすい、すたこら歩ける。オレが買った 2600 円のワカン、木製にビニールの縄、黒く無骨なゴムバンドで固定する方式、すぐに潰れるかと思ったが、さすがに山里の知恵、昔から雪国の人は手造りの木製のワカンを縄で靴に縛り付け、野原や小高い山を闊歩していたのだろう。ただこれには爪が付いていない、斜面が急になるとズルリと滑る、歩きながら爪の事を考えた、１ミリ厚ぐらいのアルミの板を折り曲げて三角形の爪を作り、それをうまく木に巻き付けて取り付けられないものかと考えた、こうまげて、此処はこうして、金槌で叩いて、金具のバンドで絞め、と色々アイデアが浮かんでくる。
11 時頃にはてっぺんまじか、快調に登って来た、疲れはない、山も地面も真っ白、トレースが付いているのが有難い、踏み跡が在るのと無いのとでは大違い、下からずっと在ったトレース、踏み跡をたどって簡単に登れた、「ラッセル泥棒」なんのその、「ありがとう」の一言だ。ほとんど快晴の空、周りの山がよく見える「剣が見える、あれが剣岳、剣には雪が付かないので何時も黒い岩山、それだけ厳しい山、富山の人はすぐに剣だとわかる」「なるほど知らなかったが、あれは剣なんだ」剣から猫又とか馴染みの山々が並んで見える、「反対側は、雄山に五色岳、薬師と続く」「おおなるほど」と感心しながら聞くばかり、久子さんは登りも強い、山の事もよく知っている、なかなかの山女なんだ、まだまだ衰えを知らないのに比べ、オレの方は年々体力が減って行っているようだ。
てっぺんで小休止、パンとコーンスープ、唐揚げ数個「お宮さんを周って帰りましょう、トレースがあるかな」と歩き出した。大きな石の鳥居のてっぺんだけが出ている、この下には祠が在るのだろうけれど、まったく見えない、東屋もあるが相当に埋まっている、積雪３メーターは在るかもしれない。「地図ではここをぐ～っと周って、下に降りるようになっているが・・」と降りる場所を探すがなかなか見当たらない。「下に林道が見えている、あそこに突き当たればいいのだから、なんとかなるでしょう」と尻セードでスルリと降りた。「やるなあ」と感心しつつオレも真似た。ぐんぐん下る、快調に下るが、崖に近い処に出てしまった。ここからが怖い、崖を下るのは怖い、真下には道が見えている、「この下がトンネルの出口、この両サイドのどちらかに降りたらその後は林道歩き」怖がりのオレ、まずはワカンを外し、リュックにしまい、慎重に雪に靴を突っ込んでステップを切っていく、グイグイグイと靴を押し込むと地面が固まる、次の足を出してまた地面を固める、その繰り返し、すいすいとは早くはいけないが、確実に安全に下の方に降りられた。万が一落ちても雪のクッションで大怪我はないと言い聞かせてゆっくり降りた。林道を１時間歩く。ワカンを着けて歩く、スピードが出ない、体力がいる、スコンと下まで足が入り込む、林道で水が流れている処は深い処に地面が見える、落ちないように要注意。車の在る処に帰って来たのが予定の３時、がはは、なかなか楽しい山でした、一人ではとても来れない山でした、ハイキングの山も冬は厳しい。